

## 16. フェリッペ2世(その2)聖ヘロニモ修道院



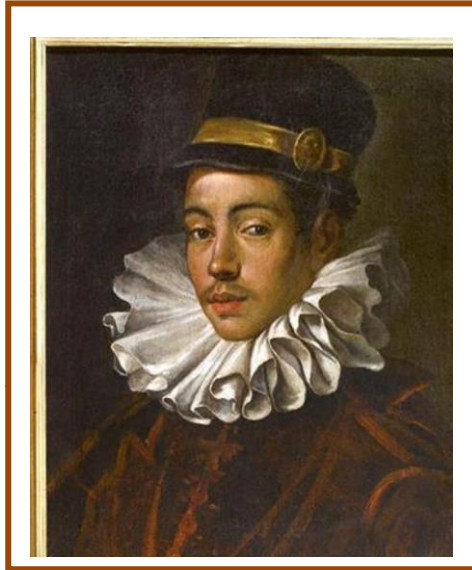
聖ヘロニモ教会は現在、正式には王立サン・ヘロニモ修道院教会と呼ばれています。フェリッペ2世の息子であるフェリッペ3世の立太子礼が行われて以来、これまで歴代のスペイン国王の立太子礼や即位式に使われています。

実はこの現在の聖ヘロニモ聖堂は伊東マンショたち天正遣欧使節が、時のフェリッペ2世スペイン国王に謁見したあの聖ヘロニモ修道院の礼拝堂そのものではないそうです。上の写真の手前の赤いレンガが見えている部分は、プラド美術館の新館でヘロニモ館と呼ばれていますが、旧聖ヘロニモ修道院の回廊部分を復元して建てられたものです。おそらく、この現在の聖堂とプラド美術館の新館を含むもっとずっと大きな規模の修道院だったと思われ、当時はむしろ現在のプラド美術館新館のヘロニモ館の場所にあったと言われている聖堂で、遣欧使節の謁見式は行われたようです。

少年たちが日本を発った1582年には、既にスペインはポルトガルを併合していましたが、イエズス会の修道士たちにとってはポルトガルこそがスポンサーであり続けました。また、スペインもポルトガルを併合したものの、その統治は間接的であり緩やかなものでもありました。とはいえ少年たちを法王に謁見させるためにローマへ連れて行こうとしていたイエズス会の修道士たちにとって、スペインはスポンサーの会社を買収した親会社ということになります。どうせリスボンから山越えでスペインに入り、バレンシアかカタルーニアのどこかの港から地中海に漕ぎ出す以上、マドリッドで国王に表敬のための謁見を

申し入れることは、当時の礼儀として当然のことだったに過ぎません。

ところが「太陽の沈むことのない国」の絶対権力者として恐れられていたフェリッペ2世は、伊東マンショたちのためにこれ以上は考えられないというほどの舞台を用意した上で、国王でも皇子ですらない4人の少年を我が子の立太子礼の場に迎えたのです。それがフェリッペ2世のただの気まぐれだったとは思えません。転んでもただでは起きない男なのです。彼が歓迎の儀式を用意する以上、それが彼にとって何らかの実利を生むことを期待していたと考える方が自然です。わたしには、その実利が何であったか想像もつきませんが。



もっとも、少年たちは当時のヨーロッパ人にとって、まさに神秘の国オリエントから舞い降りた天使たちだったようです。14～5歳という年齢、豊織期の贅を凝らした衣装や携行している太刀の拵えなどの技巧の緻密さ、少年たちの所作や言動の涼やかさ、端麗さ、どれをとっても当時のヨーロッパの上流社会の大向うをうならせるに十分だったのではないのでしょうか。

昨年、イタリアで見つかったこの伊東マンショの肖像画は1587年にマンショらが北部ベネチアを訪問した際に、ルネサンス期のイタリア画家ティントレットの息子、ドメニコ・ティントレットが描いたものとされています。肖像画のマンショは着物姿ではなく、南蛮風（当時のスペイン風）の衣裳を着用していますが、別の肖像画では和装のものもあるそうです。

フェリッペ3世の立太子礼には伊東マンショたちも列席しています。熱心なキリスト教徒であったフェリッペ2世にとって、はるばる東方から息子の立太子礼を祝福しに来た（のではありませんが）4人の見目麗しき少年たちを、キリスト誕生の時の東方の三博士に置き換えていたのかも知れません。

右の写真は当時のドイツで発行された新聞記事だそうですが、直接の訪問地でもないドイツでさえ、一面トップに少年たちの動向が掲載されるほどの大ニュースだったわけです。それにしても、大友宗麟の時代にヨーロッパでは、こんなカラーの新聞が印刷されていたんです。多感な少年たちがヨーロッパでの生活の間、どれだけの衝撃、感激、感動を感じていただろうかと、わたしはそのことに思いを馳せざるを得ません。



彼ら四人の少年たちの後半生は厳しいものとなりました。伊東マンショは帰国後、変遷を経て、千々石ミゲルを除く他の二人と共に司祭の資格を得ますが、時はすでに禁教令の出た後でした。1612年（慶長17年）に長崎で亡くなっています。40代初めくらいだったようです。原マルティノは追放先のマカオで1629年に、中浦ジュリアンに至っては1633年に刑死しています。ひとり棄教した千々石ミゲルも、反キリシタン派、親

キリシタン派の双方から裏切り者として命を狙われただけでなく、その墓所さえ秘匿しなくてはならなかったのです。ようやく最近になって諫早市にある彼の息子の知行所だった場所に葬られていたことが判明したそうです。